

報告事例番号①

施設キュウリ産地の維持・強化に向けた支援

計画年度：平成30～令和2年

館林地区農業指導センター



1. 課題設定の背景と理由

邑楽館林の特徴

群馬県の東端
渡良瀬川・利根川に挟
まれた平坦な水田地域

- ・豊富な水
- ・冬季の日照量が多い

昭和30年代から取り組むキュウリ栽培



JA邑楽館林 (令和2年度)

生産者 : 約550戸
出荷量 : 約16,260t/年
占有率 : JA青果出荷額 51%

1. 課題設定の背景と理由

生産者の特徴 (平成30年)

水稲との複合経営

平均規模：約16a

平均反収：約20t/10a

平均年齢：66.7歳

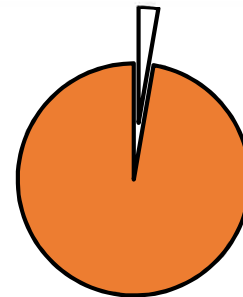
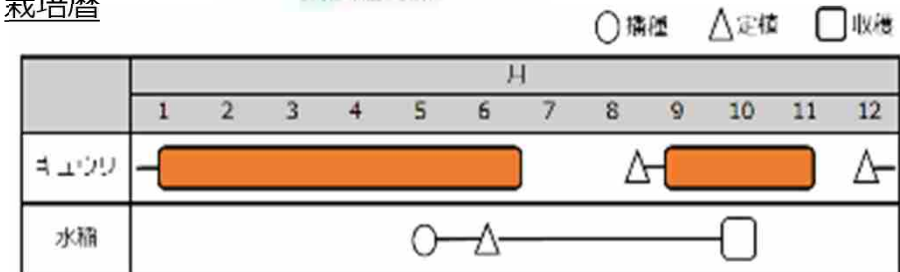
個別選果

家族経営

小規模経営体が 支える大産地

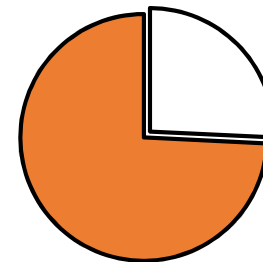


栽培暦



□ 30a以上 ■ 30a以下

ハウス面積

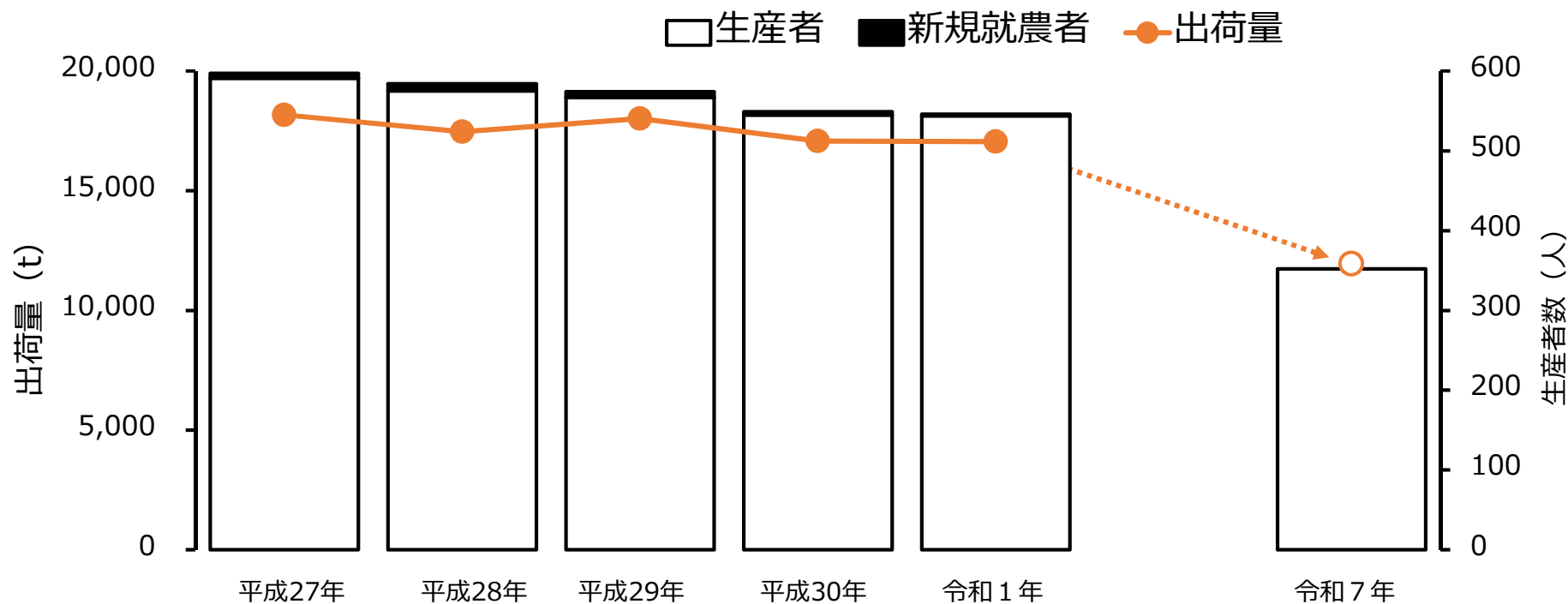


□ 60代以下 ■ 60代以上

生産者の年齢構成

1. 課題設定の背景と理由

担い手の減少に伴う生産量の減少



キュウリ出荷量および生産者数の推移

担い手の減少に伴い、

5年後、約35%も出荷量が減ってしまうかも!?

2 支援事項と解決手法

産地生産量の維持

- ・ 新たな担い手の確保・育成
支援 1 - 1 邑楽館林施設園芸等担い手受入協議会の支援
支援 1 - 2 各種研修会等の開催
- ・ キュウリ生産量の拡大
支援 2 キュウリ栽培技術の高位平準化
支援 3 雇用を利用した個別農家の面積拡大
支援 4 施設内環境制御による単位収量の増加

3 目標年次の姿（ビジョン）

新規就農者の確保と育成を図るとともに、先進技術の導入と生産者への波及を図り、現状の出荷量を維持する。

キュウリ	H29 基準年	H30	R1	R2 目標年
出荷量（千t）	18	18	18	18
新規就農者数	7	7	8	9
先進技術導入生産者数	20	25	32	32

4 活動経過及び結果

支援1-1 邑楽館林施設園芸等担い手 受入協議会の支援

邑楽館林施設園芸等担い手受入協議会の設置(H27)

構成員

管内各市町、東部農業事務所農業振興課、
館林地区農業指導センター、J A 邑楽館林

活動

受け入れ体制整備のためのマニュアルの作
成・受入れ先進地視察・PR用グッズの作成
新規参入者の募集、育成



募集ポスター



新農業人フェア



農家見学会

4 活動経過及び結果

- 7～9月 新農業人フェア等へ参加
市町広報誌、HP(第一次産業ネットなど)
- 10月 参入希望者への現地見学会
- 11月 キュウリ作業農家体験
- 12月 長期研修申請

	H30	R1	R2	R3
現地見学会参加者数	3組4名	6組7名	2組3名(コロナ禍のため個別実施)	
研修生受入れ数	0名	0名	2名(内1名は露地ナス研修期間1年)	2名

令和2年度はコロナのために活動が制約

4 活動経過及び結果

支援1-2 各種研修会等の開催

- ・ 基礎講座の開催
農業機械、
土壌肥料、
病害虫、
先輩農家見学等



基礎講座

講習会等	H30	R1	R2
農業基礎講座 延べ参加者	4回開催 39名	1回開催 12名	3回開催 22名

4 活動経過及び結果

支援1-2 各種研修会等の開催

- ・複式簿記講座の開催
(東部普及指導課主催)
- ・キュウリステップアップ講座の開催



ステップアップ講座

講習会等	H30	R1	R2
キュウリ栽培講座 延べ参加者	3回開催 33名	2回開催 7名	研修会等17回 219名

4 活動経過及び結果

支援1-2 各種研修会等の開催

- ・キュウリ若手栽培者の自主研究会の活動支援
(スタディークラブ)



自主研究会の会合

講習会等	H30	R1	R2
自主研究会 延べ参加者数	3回開催 22名	1回開催 11名	研修会等14回 144名

4 活動経過及び結果

支援2 キュウリ栽培技術の高位平準化

全キュウリ栽培農家を対象とした講習会の実施
JAと共催により

	H30	R1	R2
栽培研修会	2回 延べ65名	2回 延べ65名	7回 リモート開催
現地研修会	5回 延べ71名	5回 延べ71名	7回 リモート開催
品種検討会	4回 延べ285名	4回 延べ285名	資料配付のみ

令和2年度 栽培コンサルレポートの配布(5回)
(新型コロナウイルス感染予防のため集合研修
の中止)



栽培講習会



現地研修会

周年キュウリ 栽培コンサルレポート vol.1
 テーマ: **かん水の方法について** (12/21、第1回栽培セミナー、講師: 再春園農園)

かん水の重要性
 夏場のキュウリ栽培は、かん水が最も重要なポイントです。かん水のタイミングと量は、収穫量と品質に大きく影響します。

かん水の目安
 かん水の目安は、土壌水分率と葉の萎み具合です。土壌水分率が20%以下になると、かん水が必要です。

かん水のやり方
 かん水は、朝晩の涼しい時間帯に行い、葉に当たらないように注意します。

かん水の量
 かん水の量は、気温と湿度によって変わります。一般的には、1回あたり10~15リットルを目安とします。

かん水の注意点
 かん水しすぎると、根腐れの原因になります。また、かん水不足は、葉の萎みや果実の着色不良を引き起こします。

周年キュウリ 栽培コンサルレポート vol.2
 テーマ: **連熟対策について** (12/28、第2回栽培セミナー、講師: 再春園農園)

連熟の原因
 連熟の原因は、日照不足と高湿度による呼吸作用の亢進です。

連熟の対策
 連熟を防ぐためには、適切なかん水と通風対策が重要です。

連熟の判断
 連熟の判断は、果実の色と硬さの変化を確認します。

連熟の予防
 連熟を予防するためには、適切な収穫時期の判断が不可欠です。

周年キュウリ 栽培コンサルレポート vol.3
 テーマ: **秋の高湿度対策について** (1/15、第3回栽培セミナー、講師: 再春園農園)

高湿度のリスク
 高湿度は、病害の発生や光合成の低下を引き起こします。

高湿度の対策
 高湿度対策には、カーテンの開閉と換気扇の活用が効果的です。

高湿度の判断
 高湿度の判断は、露点温度と相対湿度の測定を行います。

高湿度の予防
 高湿度を予防するためには、適切なかん水と通風対策が重要です。

周年キュウリ 栽培コンサルレポート vol.4
 テーマ: **光の有効活用で光合成を促進させる** (1/22、第4回栽培セミナー、講師: 再春園農園)

光合成の重要性
 光合成は、植物の成長と果実の生産に不可欠なプロセスです。

光の有効活用
 光の有効活用には、カーテンの開閉と人工照明の活用が効果的です。

光合成の判断
 光合成の判断は、葉の色と果実の成長を確認します。

光合成の予防
 光合成を促進するためには、適切なかん水と通風対策が重要です。

周年キュウリ 栽培コンサルレポート vol.5
 テーマ: **春の曇天に注意すべき管理** (1/29、第5回栽培セミナー、講師: 再春園農園)

曇天のリスク
 曇天は、光不足による光合成の低下と病害の発生を引き起こします。

曇天の対策
 曇天対策には、人工照明の活用とカーテンの開閉が効果的です。

曇天の判断
 曇天の判断は、日照時間と光量の測定を行います。

曇天の予防
 曇天を予防するためには、適切なかん水と通風対策が重要です。

配付資料

4 活動経過及び結果

支援3 雇用を利用した個別農家の面積拡大

経営管理研修会の開催

H30・R1

経営コンサルタントの講義

R2

労働基準監督署、
社会保険労務士
雇用導入農家からの説明



雇用導入農家から説明

	H30	R1	R2
経営管理研修会	雇用管理研修 1回 33名	経営意識研修会 1回 36名	雇用研修会 3回 延べ40名

4 活動経過及び結果

支援3 雇用を利用した個別農家の面積拡大

米麦と施設キュウリ
作業分離

新規就農者、女性農業
者への代かき講習会



代かき講習会

	H30	R1	R2
代かき研修会	3名	5名	6名

4 活動経過及び結果

支援3 雇用を利用した個別農家の面積拡大

経営相談所の利用

(キュウリ農家 3戸)

規模拡大希望農家
に対してスペシャリスト
派遣



スペシャリスト派遣

	H30	R1	R2
経営相談所派遣	2回	4回	1回

4 活動経過及び結果

支援4 施設内環境制御による単位収量の増加

栽培環境の見える化・見直し（H30～R2）

- ・施設内環境モニタリングで課題発見。
- ・改善のために先進技術の導入（炭酸ガス発生機、日射比例かん水設備等）。

外部専門家による技術指導（R2）

民間の栽培コンサルタントによる先進技術の指導。

生産者による勉強会活動の支援（H30～R2）

情報共有や技術研鑽のための勉強会（スタディクラブ）の活動を支援。

施設内環境のモニタリング

イメージしやすい短期間の目標を示す

クラウドを活用したデータの**リアルタイム共有**



プロファイナークラウド



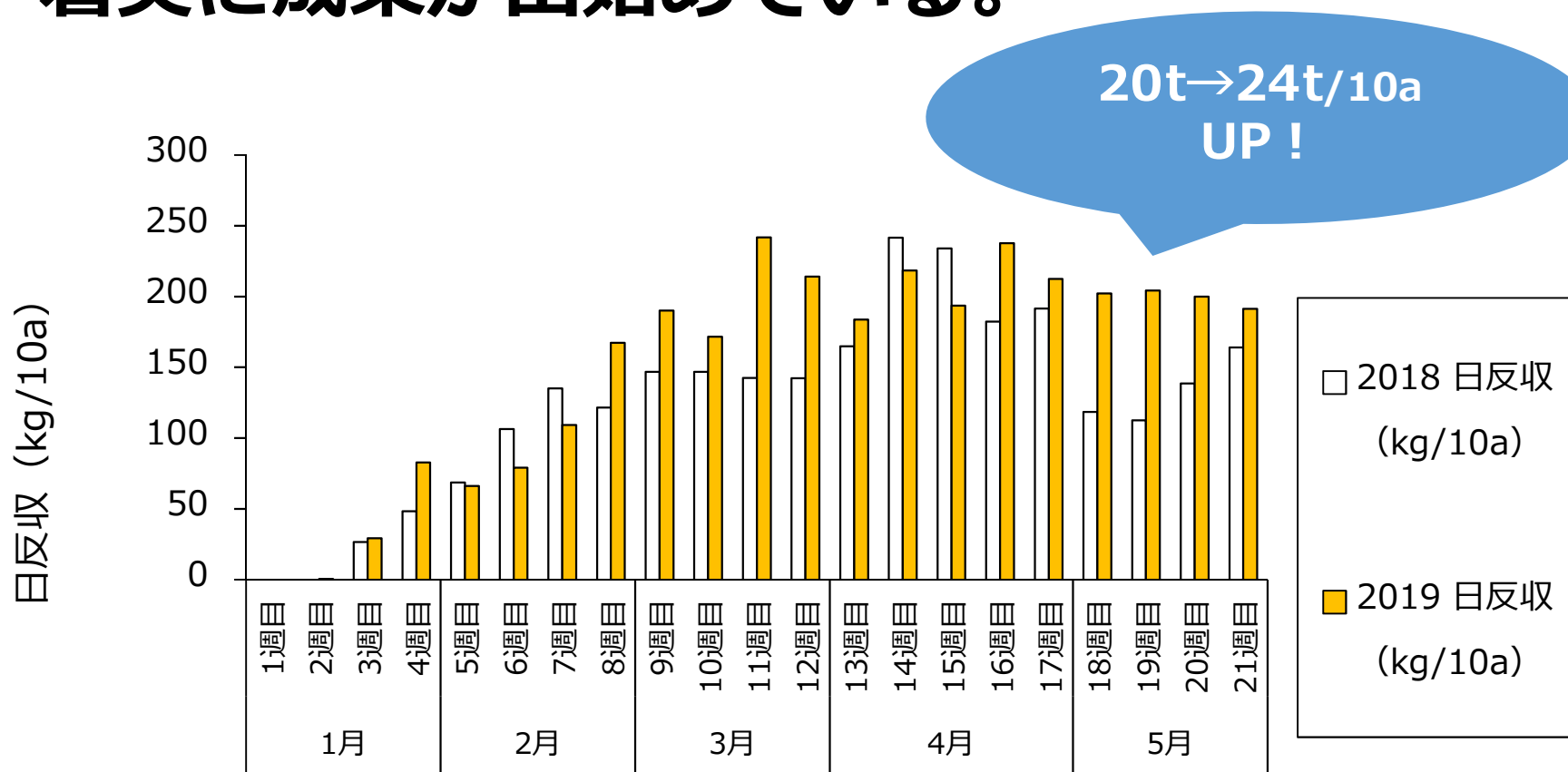
Point

実績（出荷量）を生産者に記録してもらうこと！

環境制御技術の取り組みの成果

肝心の出荷量は？

着実に成果が出始めている。



出荷量 (A氏、平成30年1月~5月、平成31年1月~令和元年5月)

4 活動経過及び結果

新規就農者の確保と育成を図るとともに、先進技術の導入と生産者への波及を図り、現状の出荷量を維持する。

キュウリ	H29 基準年		H30	R1	R2 目標年	達成率 %	R5 次期目標
出荷量（千t）	18	目標	18	18	18	94.4%	16
		実績	17	17	16		
新規就農者数	7	目標	7	8	9	34.8%	2
		実績	4	2	2		
先進技術導入 生産者数	20	目標	25	32	35(32)	106%	42
		実績	28	33	36		

注) (数字)は当初の目標。達成したため上方修正した。

達成率は、出荷量はR2の実績、そのほかの項目は各年度の達成率の平均。

5 残された課題と今後の対応

新たな担い手の確保育成

- ・ 担い手協の支援体制の強化
先進地視察
研修生、受入れ農家の意見収集
- ・ 農家後継者の掘り起こしと支援
- ・ 経営継承など新たな形での経営の継続
空きハウスの提供→経営継承

5 残された課題と今後の対応

キュウリ生産量の拡大

- ・雇用管理技術の習得
人材の確保・法人化の支援
- ・施設園芸と水田作の共生
水田作業請負農家の育成
- ・出荷労力の軽減
選別調製の見直し
- ・施設内環境制御技術の普及
ネットワーク化・コンサルの導入